

ヤン・トゥーレ
Yann TOURET

[Maison Wabi-Sabi代表(フランス・パリ)]

日本語訳: 萩慶子

日本の陶芸に魅了された筆者が、
日本のすみずみまで作家の工房を訪ねた
セラミックツアー（窯場・工房めぐり）について語る。

フランスの地で、

日本のやきものをめぐる息の長い構想を形に—

メゾンワビ-サビ

M a i s o n W a b i - S a b i の 思 い

パリで日本の陶芸を販売する

ギャラリー外観

Maison Wabi-Sabi は常設
ギャラリーは持っておらず、
毎回、La Galerie Guillem (8
rue du Général Guilhem,
Paris, France 75011) で、季
節毎に、Collection HARU,
NATSU, AKI, FUYU と題
し、1年に4回の展示を行っ
ている。その他に1年に1
〜2回春か秋に特別企画
展として、個展かテーマを
設けたグループ展を開催。
2026年10月は「織部展」開
催予定。



第
3
回

フランスにおける
日本の陶芸

この度、本誌「陶説」に寄稿して
きた過去二回の文章を通じて、フ
ランス人の私が、日本における日本
の陶芸に対するさわめて個人的な見解を
つづる機会をいただきました。本稿で
は、二〇一七年に始動した「Maison
Wabi-Sabi」の活動を通して得られた
経験をもとに、フランスにおける日本
陶芸について私見をお話したいと思
います。この考えは、私が主催したフ
ランスの展示会での数多くの出会いに
加え、SNS上で交わされた、さまざ
まな対話を通じて得られた経験と実感
に基づくものです。

長年にわたり活動が続ける中で、と
りわけ強く実感しているのは、日本
の手仕事による陶芸に対して、人々が深
い関心を寄せているということです。
私が出会った人々は、日本陶芸につ
いてさらに理解を深めたいという思いが

強く、その産地、制作工程や技法、そして何よりも、一つ一つの作品の背後にいる作家について知りたいと願っています。日本の陶芸は、単なる器やオブジェとしてではなく、作家の思い・技法・人生が凝縮された「ストーリーを持つ造形」として受け止められているのです。そのため、作品の背景を知ることが、彼らにとって鑑賞する上で重要な一部となっています。

しかしながら、このような日常使いを目的とした手仕事からなる「うつわ」は、いまだに、富裕層やコレクター、あるいは一部の愛好家だけに許された高級品として受け止められることが少なくありません。また多くの人々は、それをあくまでも鑑賞・装飾のための器と考え、「破損してしまうのではないか」という懸念から、実際に料理を盛り付けたり日々の食卓で用いたりすることをためらいます。そこには、「手仕事の陶器は繊細で壊れや

は、ふらりと立ち寄る一般の来場者から、コレクター、陶芸家、さらには飲食業に携わるプロフェッショナルまで、さまざまな立場の人々が足を運びます。年齢層は概ね二十五歳から八十五歳で、来場者の約七割が女性、三割が男性です。

フランスにおいて、日本の陶芸と出会う一般的な接点はSNSが多いと感じています。また、日本を訪ねて陶芸家や職人取材し、アトリエでの制作現場を紹介するクリエイターたちの存在も、その認知を広げる重要な役割を果たしています。さらに近年では、陶芸全般への関心の高まりも、日本陶芸への注目を集める大きな要因です。とはいえ、日本の陶芸に対する一般的なイメージは、依然として半工業製品や工業生産による量産品と結びつけられることが少なくありません。一方で、すべての工程を手仕事によって生み出される陶芸作品は、陶芸家の所作や人



展示の様子



ギャラリーの内観



ギャラリーの内観



内側よりショーウィンドウ

すいものに違いない」という先入観が根強く存在していると考えます。

だからこそ、私は展示会で来場者に、陶芸作品について丁寧に説明し、その魅力を共有し、さらには器を見る眼を育んでもらうことが重要であると考えています。陶芸は、日本のみならず世界各地において先史時代から営まれてきた、人類最古の造形文化の一つです。しかし今日、私たちの暮らしにある「うつわ」は、安価に流通する工業製品へと大きく移行し、それが日用品に対する私たちの価値観や向き合い方を大きく変化させてきました。その結果、手仕事の陶芸との距離は、いっしょに少しずつ広がってしまっているように感じています。

日本の陶芸へのイメージ

日本の陶芸家による手仕事の作品を求める人々は実に多様です。展示会に

間性、さらには受け継がれてきた技法に価値を見出す人々の心を、とりわけ強く惹きつけると確信しています。

陶芸がブームとなっているフランスでも、日本の手仕事による陶芸に対する理解は、いまだ十分に深まっているとは言いがたく、その背景には歴史的な経緯が大きく影響しています。十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、ヨーロッパ市場に広く流通した日本製陶磁器の多くは、手工業生産による量産品でした。この現象は日本がパリ万博に出展した翌年一八六八年以降に本格化し、一八九〇年頃から一九三〇年頃にかけて最盛期を迎えた後、一九三〇年代末には次第に衰退の道を歩みました。戦後の一九四五年以降、日本からの輸出は徐々に再開されますが、その背景には戦前とは大きく異なる経済状況がありました。日本製の陶磁器は、とりわけヨーロッパ製品に比べて三割から五割ほど安い価格で供給されたこと

から、市場で大きな成功を収めます。そして、その「異国情緒」を感じさせる意匠も、十九世紀末のヨーロッパを席巻したジャポニスムの潮流とも響き合い、高い人気を博しました。とりわけファイン・ポーセリンの分野においては、その品質の高さが評価され、日本製の陶磁器は国際市場で確固たる地位を築いていきました。

この歴史は、今日に至るまで長く深い爪痕を残しました。現在でも、「日本の陶芸」と聞くと、多くの人が真っ先にこうした工業製品や半工業製品を思い浮かべるのです。手仕事による陶芸が持つ驚くほどの豊かさ、多種多様な工房、地域ごとの伝統、そしてそれらを支える男女の作り手たちの存在はいまだ広く知られていないのが実情です。私が「Maison Wabi-Sabi」を通じて伝えようとしているのは、まさにこの、今も息づく豊かな生きた歴史なのです。

Maison Wabi-Sabi 取り扱い作家一覧

(2026年7月現在)

日本で活躍する作家(五十音順) 計61名

荒川智、安洞雅彦、池田省吾、伊豆野一政、伊勢崎剛、伊藤美山、伊藤千穂、岡田泰、尾西宏紀、金本卓也、川口由美子、北村風巳、倉田英郎、小辻真一、小割哲也、坂口健、佐藤富江、佐藤久志、ジュイムス・イラズムス、柴岡力、柴田良三、澁田寿昭、清水潮、釋永由紀夫、釋永陽、瀬戸口皓嗣、瀬戸口豊寛、竹内真吾、谷本貴、辻村塊、辻村唯、寺田鉄平、陶工房旂、豊福博、中川恭平、波多野英生、浜田敦士、濱田友緒、藤原和夫、藤村州二、マイク・マルティン、前川妙子、榎原太郎、松永真哉、水野半次郎、宗像利訓、村上周、村田紀之、森敏彰、山元一真、山本太仙、柳下季器、ユアン・クレイダ、雪ノ浦裕一、吉田豊一、吉田学、吉田雄貴、吉野香岳、渡邊葵、渡邊敏明、渡仁

フランス人作家 計23名

Anne GESRET de Atelier Forêt, Annie METZGER et Suzanne KRETZ de Atelier Terre de Lune, Lisa BOMBIN et Mael AMEMITYA LOMBARD de Atelier Yugen, Benoît LAMY, Benoît VIET, Claire

BRIANT, Cyril DENNERY, Edith BELLOD, Florence LUCCHINI, Guillaume PARISON, Jules LEROY, Julien BERNIER, Kristina MASKOS, Lukas RICHARZ, Mathilde DUMOUSSEAU, Maud THIÉFAINE, Patrizia ROVERE, Peggy GERMAIN, Perrine POTTIEZ, Sara MAUVILLY de Argile124, Stéphane RAYMOND de Atelier Sentsuko, Thérèse LAUMAILLÉ, Veronique MAURY

フランス以外のヨーロッパの作家 計7名

Tomasz NIEDZIOLKA (ポーランド) Yuta SEGAWA (ドイツ) 瀬川勇太 Geert VAN DER BORGHT (ベルギー) Alfonso d'Ors (スペイン) Jacopo CUCCI (イタリア) Michal KOZCZOR (ポーランド) Sean SILVA (ポルトガル)

その他の国 計6名

Victoria DRISALDI & Fernando LÓPEZ de Espacio Cerámica (メキシコ) Tara MAYER (カナダ) Lee Eun Bum (韓国) Park Jae Guk (韓国) Won Chai (タイ) Aaron SCYTHER (リトアニア)